

同人誌時評

桜井克明の相對峙する  
異質の人物を描き分け、

人生とは何かを問う現代小説〔残党〕

花島真樹子の女優の哀しく侘しい死を綴る作品(「遠近」)、  
森下征二の藤原泰衡の母を描く歴史読物(「文芸復興」)

志村有弘

花島真樹子の「虹のかなたへ」(遠近第70号)は、女優の死を描く。老人ホームの住居人石堂ゆりえ(舞台女優・七十六歳)が交通事故致死した。ゆりえは舞台女優よりのテレビの出演で知られていた。死ぬ二日前、施設の職員戸田に不倫が原因で過去二度の自殺未遂をしたことを語った。戸田が、脇役で不満はなかったのかと訊くと、「仕方ないじゃない、だって私は女優ですもの」と応えたゆりえの悟りきった姿。「五十年遅く生まれ

ていて戸田さんに会えていたら」と告げるゆりえの心情が哀れ。ゆりえは金も尽きていた。しかし、女優として精一杯生きて自殺したのだ。読後の寂寥感とは別に、爽やかな抒情を感じさせるのは、作者の伎倆。筋の展開も文章も達者だ。